

30万の敵兵を滅した男
最後に何を思う…

とある昔の物語

都に知らせが入る
海の方こうで
大きな戦の準備が
進んでいるらしい
と

その数およそ

5000を超える

戦船

10万とも言われる

将兵

数は日々増えると聞く

宮廷に呼ばれた男がひとり

猿者が
殿上人に
呼び出される

戦を鎮めよとの事

そちらは
不思議な術を
操ると聞く
それで何とかせい

兵衛に囲まれては御意しか無かった

「はい」

と

言わなきゃ

首が飛ぶ…か

与えられた兵力は

3000の守り手

私に

出来る事は

天候を読む事

日を導く事

考えはある

南の島で
静かに
準備を整える
穴を掘り矢を揃え
刻を待つ

舞台は整った

よく晴れた秋の空
兵は動く
30万の将兵を連れ
7000隻の艦影で

岩場で激しく演者は舞う

守り手が猛攻に
耐えていると
風は吹いた
さらに激しく舞うと
強風に

一晩経つと海は静かに

強風はやがて
嵐になり
大荒れの海は
1つまた1つ
船を呑み込む

戦は終わった

700もの守り手を
失った…が
7000の船は消え
30万の将兵は
もう居ない

海岸に流れ着いた敵兵も消えていく

普段は
漂流者には
優しい民も
今回は容赦は
しない様だ

しばらくの待ちを再び

猿者は
宮廷に呼ばれる
大層な褒美を
期待し
都へ向かう

帝を前にして放たれた一言

官人は言う
「此度の
帝を呪いし行い
万死に値する」
と

殿上人がそばにより

耳元で囁いた
“帝を超えるは
この世にあっては
ならぬ物よ“
「ゆるせ」

猿者は静かに天を仰ぐ

敵とは言え
30万もの命を奪った
その責めは
背負えと言う事
かな

猿者は静かに天を仰ぐ

敵とは言え
30万もの命を奪った
その責めは
背負えと言う事
かな

刑は速やかに行われる

猿者は
家族の命を
乞えてみた
“無理”
とは思いつながら

冤者(えんじゃ:濡れ衣ね)の数は

私と妻と子

門下

27名…

恩あるものが取ったのは

捨てる神あれば

拾う神あり

こっそり

猿者一行は

逃げ延びたとも

刻は流れて…

もし

片目を瞑って

丘から街並みを眺める

親子が居たら

その者の縁者かも

色々と考えさせられる
物語

力を使う。難しいこと。
良くも悪くも…

それにしても隣国は
しばしば攻めて来ますよね

ご清聴ありがとうございました。

2025/05/03